永遠の絆

LAÇOS ETERNOS

ジビア・ガスパレット［著］
Zibia Gasparetto
木下眞穂［訳］

I777.45
J11

Zibia Gasparetto
ジビア・ガスパレット

霊能作家。1926年7月21日、ブラジル・サンパウロ州生まれ。22歳
れた体験をきっかけに、フランス人霊能者アラン・カルデックの
ビリティズムに目覚める。自らの霊能力を自覚した後は、霊が彼女の体を使って、小説を書くようになる。1960年に最初の小説を発表してからは、毎週霊が降りてきて、一冊ずつ本を書き上げていくという。本書『永遠の絆』は、ルシウスという霊のお告げによって書き上げられ、1987年の刊行以来、70万部も売り上げた作者最大のベストセラー。これまで、32編の小説を発表し、900万部以上も売り上げている。

木下眞穂
きのした まほ

1968年生まれ。上智大学ポルトガル語学科卒。88年～89年、90年～91年にポルトガルに留学。大学卒業後、ポルトガル大使館文化部に勤務するかたわら、ブラジルやポルトガルの映画字幕の監修、テレビ番組の翻訳、音楽CDの歌詞の翻訳などを手がける。

永遠の絆
えいえんのきずな

2009年4月16日　初版発行

著者
ジビア・ガスパレット

訳者
木下 眞穂

発行者
新田 光敏

発行所
ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒107-0052　東京都港区赤坂4-13-13
営業　03(5549)1201

装画
中島 梨絵

印刷
株式会社光邦

ブックデザイン
Malpu Design(原田 恵都子)

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写・複製・転載することを禁じます。
落丁、乱丁は小社販売局にてお取り替えいたします。

Printed in Japan　ISBN978-4-7973-4851-4

232140

江苏工业学院图书馆
藏书章

永遠の絆

LAÇOS ETERNOS

ジビア・ガスパレット[著]
Zibia Gasparetto

木下眞穂[訳]

LAÇOS ETERNOS
by Zibia Gasparetto

Copyright © Zibia Gasparetto 1987
All rights reserved

Japanese translation rights arranged with
Centro de Estudos Vida & Consciência Editora Ltda.
through Japan UNI Agency Inc., Tokyo.

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

序章 7
1 農場の家族 12
2 天の国で 23
3 甘く幸福な日々 34
4 忍び寄る影 40
5 殺人者の素顔 53
6 思いがけぬ結末 67
7 バレンヌ男爵の後悔 73
8 ビルフォール医師の教え 88
9 最期の許し 97
10 愛の芽生え 107
11 憎しみ 120
12 忍び寄る影 130
13 悪の勝利 144
14 罠 151
15 旅立ち 162

16 ことの起こり 191
17 ロッキの家出 199
18 帰郷 208
19 町での生活 216
20 導き 228
21 苦しみの時 245
22 母の病 252
23 ふたつの家族 261
24 新たな出発 280
25 母と息子 286
26 脅迫 304
27 森への逃亡 319
28 マリアの変化 325
29 新しい道 336
30 銃弾 347
31 天の国への帰還 354
32 永遠の絆 363

序章

夜。なにもかもがおだやかな静けさに包まれている。空がほんのりと明るくなり始めても、まだ薄暗いなか、生命の息づかいを伝えるのは夜明けを告げる小鳥たちのさえずりだけだ。

暗い窓のそばの人影は、夜がひっそりと終わりを迎え、しらじらとした光が一日の始まりを告げるのをじっと見つめていた。

その顔は明け方のぼんやりとした光の下で青ざめて見える。真実の道を照らす最初の日の光を見つけようと、やっとの思いで身体を支えている。

苦しげなうめき声が夜明けのさわやかな静けさを破った。こん棒で殴られたような痛みが全身をつらぬき、窓枠によりかかっていた身体がぐらぐらと揺れた。

息がつまるかと思うほど咳きこみ始め、ハンカチを口元にあてた。みるみるうちに、ハンカチは真っ赤に染まり、温かい血がどっとこみあげてシャツをぬらした。

やせ細った身体で力をふりしぼり、なんとか起き上がって空を見上げた。落ちくぼんだ目は見開かれ、なぜわたしは生まれてから十四年間ずっと苦しみ続けてきたの、と問いかけているかのようだ。

嵐のなかの一輪の花のように、細い身体はゆっくりと折れ曲がり、床にくずれ落ちた。それでも顔は朝日がのぼる方角を向いていた。すでに光を失った目は、しっかりと開かれたままだ。まるで生と死を分ける深遠な謎の答えを探し求めるかのように。

しばらくすると、固くなった身体はまばゆい光を放ち始め、少女の姿そのままの形を作りあげた。奇跡が起こり、大いなる手でもうひとりの少女が生まれたかのごとく、その光はすっと立ち上がった。

少女の形をした半透明のその光は驚いたように、今しがた抜け出してきた自分の肉体を見下ろした。その顔には深い信仰心と豊かな愛情がにじみ出ている。

身体は軽く、ふたたび力を取り戻したようだ。しかし、動かない肉体を見下ろすうちに、さっきまで自分を支配していた悲しみが強くよみがえってきた。その瞬間、もう一度冷たい牢屋に閉じ込められたような錯覚を起こし、はっとして、冷たい肉体から目をそむけた。

その時だ。おだやかな顔をした美しく光輝く人が手を伸ばし、こちらにやってくるのが見えたのは。

（あのお顔を見たのはいつだったのかしら。あの方は聖女さま？）

まばゆい光を放つその人を前に、少女は思わずひざまずいた。香り高く優しいそよ風が少女の両頬をなでると、恐れと不安でいっぱいの少女の魂に、甘い声が語りかけてきた。

「ニナ。あなたは自由です。つらい試練を乗り越え、傷を負って捕えられた小鳥のような日々を終え、あなたは自由を手にしました。今日はあなたを迎えに来たのですよ。あなたが昔から夢見ていた平和と静けさに満ちた幸福な世界に、わたしとともにまいりましょう。そこであなたは高貴な仕事を与えられ、心地よく満ち足りて過ごすのです」

ニナは目をあげた。こらえきれずに涙がとめどなくあふれ出てきた。

「聖女さま！　天上の世界からわたしをお迎えに来てくださったんですね。わたしにはもったいないようなお言葉をかけてくださって、感謝の気持ちでいっぱいです。あなたさまの住んでいらっしゃる素晴らしい世界で、おだやかな日々を送れたらどんなに幸せでしょう。けれど、たくさんの愛情を受けて育ったこの家で、血を分けたわたしの家族は、今、貧困にあえいでいます。

父は、昔は気位の高い人でしたが、今は、わずかばかりのパンを手にするために、安い賃金で身を粉にして働き、誇りも失いかけています。天使のような四人の弟妹もいます。マラリアや栄養失調で苦しみながらも、人生に対して目が開けてきたばかりの子たちです。もしわたしが逝ってしまったら、あの子たちも遅かれ早かれわたしのあとに続くことになるでしょう。まだまだか弱いあの子たちの命は、結核やほかの病気で、成長もせずにつみとられてしまうに違いありません。ですから、もしできるなら、お願いです、聖女さま。わたしが一生懸命世話をしてきた愛する家族のために、わたしに開かれていた神聖な場所への道が閉ざされてもかまいません。こんなお願いをするな

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

んてぶしつけだとはわかっています。でも、家族が苦しんでいるというのに自分だけ幸せになるなんてとてもできません」

ニナはうなだれながら、返事を待った。

光輝く人はニナに近づき、右手をあげると、このうえなく優しく頭をなでた。

「ニナ。なにが望みなのですか」

「聖女さま、わたしは残りたいのです。たとえ病気のままでも、なんとか家の用事ができます。そうすれば母はわずかでも稼ぎに出られます。でもわたしが逝ってしまったら、母は仕事を辞めなければなりません。そうなれば、家族の食べるものがますます乏しくなってしまいます」

美しい女性は心を動かされた様子でほほえみ、答える。

「ニナ、自分がなにをいっているのかわかりますか。神がおまえに戻ることを許すとすれば、これまで以上に苦しむことになるでしょう。おまえが使っていた肉体はすっかり衰えきっているのですよ。ほかのものに食べさせるために、自分はもう食事はすんだと何度嘘をつきましたか？　そのようにして一日中、一口も食べずに過ごした日はどのくらいあったのです？　おまえはもう十分苦しみました。平和と充足を与えようといっているのに、痛みや病気、貧困と死のほうがよいというのですか？」

ニナは泣きじゃくり始めた。

「わたしは残りたいのです。わたしが願うのはそれだけです」

その人は優しくニナをじっと見つめたが、そのまなざしには光と力が宿っていた。

「願いをかなえるわけにはいきません。いつかおまえにもわかる時が来ます。今いえるのは、おまえの地上での滞在期間は終わったのだということだけです。病気で苦しむおまえがいたところで、あの家が救われるということはありません。しかし、恐れることはないのですよ。地上でずっと捨て置かれたままの人間なんていないのです。献身的なおまえの弟が、下の子たちの面倒を見るでしょう。神は必ずその魂を救われます。苦しみがあってこそ魂は気高くなり、神のもとへと戻ってくるのですから」

そういいながら優しくニナを抱きしめた。

「やがて、おまえの準備が整えば、会いたい時に弟たちに会いに行き、あの子たちを救うこともできるのです。さあ、行きましょう」

少女は、やっと泣きやむと立ち上がり、光輝く人とともに旅立つ決心をした。

重く縛りつけられていたものから解き放たれたように軽やかで、これまで感じたことのないほどの歓びで胸がいっぱいになり、力がみなぎってくるのがわかった。

優しく手をとられ、貧しい小屋から出て行った。

夜明けの光がこれから始まる一日に祝福を与え、生命が目覚め始めたその時、ふたつの影が寄り添いながら無限の彼方へと消えていった。清らかでおだやかな表情をたたえて。

血で真っ赤に染まったシャツを着た、白くやせた少女の肉体だけが、もう必要がなくなった衣服のように残された。その肉体は、絶え間なく変わり続ける自然の一部となり、やがては跡形もなくなっていく道のようにも見えるのだった。

1

農場の家族

ミナス・ジェライス州、ラジェアド農場の朝は早い。仕事はいくらでもあったし、労働者たちは、バルコニーの古びた鐘が仕事の始まりを告げる頃には、とっくに起き出して農地に出ていなければならなかった。

地主のジェルヴァジオ・フォルテスは冗談が通じるタイプの男ではない。労働者たちを徹底的に働かせ、彼が鹿毛の馬に乗って農地や牧草地に姿を見せると、みなが震えあがった。

恐ろしく早起きで、遅れは決して許さない。彼が鐘をがちゃがちゃと鳴らす頃には、みな、自分の持ち場についている決まりだった。

ジョゼ・モタは少年の頃からこの農場で働いていた。やはり労働者の息子で、父や家族のみじめな暮らしに嫌気がさして、十二歳になる頃には、家を出て、一発あててやろうと決めていた。そこでラジェアドにやって来て、その後、そこから一歩も出ていない。稼げるのは雀の涙で、読み書き

を習うこともできないまま。そのせいで、すっかり疑り深い人間になっていた。
暮らしをよくすることはついぞできなかったが、悪らつな労働条件に慣れてしまうこともなかった。農場主のジェルヴァジオを心から憎んでいた。彼をねたみ、同時に彼を恐れていた。天にいるのが神ならば、ジョゼにとって農場主は地上にいる悪魔だ。
いくども抜け出そうとしてみたが、あがけばあがくほど、そこから出ることは難しくなるのだった。
マリアと知り合ったのもラジェアド農場だ。出会った頃のマリアは、町で暮らすことを夢見ていた。十五歳の時、どこかの行商人と町へ駆け落ちをしかけたことがあった。しかし、ジョゼの野心が彼女をひきつけ、踏みとどまらせたのだ。彼の反体制的なところと、彼女の野心とはまたとない組み合わせだった。
（ふたりでなら町に出て幸せになれる。お金も入るにちがいない。農場主の奥方のエメレンシアナさまのように、いい服を着て、たくさん着飾って、字も読めて化粧もして、車を運転して、男みたいに煙草を吸おう）
そんな夢を見ていた。
やがてふたりは結婚した。マリアが十六歳、ジョゼが十八歳の時だ。
農場主に許しをもらい、日曜日の仕事のあとに、仲間のいく人かに手を貸してもらって、泥壁を積み上げて小屋を建てた。ベッドはエメレンシアナ奥さまからの贈り物だ。古くて壊れてはいたが、ジョゼが修理をした。

脚の折れたベッドを前に、彼の心は憎しみではちきれそうだった。誰かのほどこしを受けて満足するような男ではない。煮えくりかえるような気持ちを押し隠し、なんとかベッドの体裁を整えようと苦心した。マットはマリアが二か月かけてわらを乾燥させ、よりわけて作った。裏張りは色あせ、つぎがあたっていた。

祝宴は、マリアの両親が用意したコーヒーと、トウモロコシの粉の菓子があるだけ。そしてジョゼが農場主からもらったラム酒がたった二瓶。

つらい生活が始まった。それでもふたりで開墾地で働き、生活苦といくどものけんかの末に、いくらかの生活用品と服を買うことができた。

時は過ぎていった。子どもたちが生まれた。最初の娘は強くて美しい子だった。ニナと名づけた。出産でマリアは体を壊したが、それはあまりにも不衛生な環境だったからだ。そのため、次の子が生まれてくるまでには六年かかった。そこからは休みなしだ。ひとり産んでは、また次を産む。ひとり産まれるたびにジョゼは妻にいったものだ。

「マリア！　この子がいるから、しばらく町には行かれないな。金が足りんよ。この子がもうちょっと大きくなったら、ここを出よう」

だが、出ることなどできなかった。夫婦ふたりだった時ですら出られなかったのに、今やこんなに大勢の子どもを抱えてどうしてそんなことができようか。

ジョゼは子煩悩な父親だった。だが、子どもがひとり増えるたびに彼の怒りも増していった。子どもたちがほしがるもの、自分もずっとほしかったが決して手に入らなかったものを、与えてやれ

ないからだ。

農場主に対する憎しみが、胸のなかにじわじわと広がってきた。問答無用の、鋭く厳しい命令が下されるたびに、ジョゼは深い憎悪で身体が震えるのだった。

赤いカーテンがかかり、柔らかそうな椅子が置かれた農場主の大邸宅をねたんだ。磨きこまれた主人の息子の馬具、つやつやと光る革製のブーツ、満ち足りて愛くるしい子ども特有のにぎやかな笑い声。

農場主に会う時は目を伏せて、怒りに燃える眼差しを見られないようにした。

労働で過ごす彼の日常はこのように過ぎていった。

夕刻遅く、貧しい家に向かう道すがら、分厚い手のひらにできたたこが痛んだ。頭のなかの憎しみと同じように、その痛みも燃え上がるようだった。

なんの味もしない食事をするために、不機嫌なまま粗末な食卓に座る。食事はたいてい豆か芋、それかトウモロコシの粉か小麦粉。時には米と、農地でとれた野菜がつく時もある。

エメレンシアナ奥さまが美しく整えた清潔な食卓につくことを夢想することもあった。きれいなグラス、うまそうな匂いが立ちのぼるいろいろな食べ物。

マリアは愚痴っぽくなり、よけいにジョゼをいらだたせた。もう少しましな町の生活を夢見ていたのに、悲劇的な現実のなかで不幸になっていくばかりだというのだ。

夫はますます無口になっていった。夫の励みになればと思えばこそ口を出しているというのに、マリアのけなげな努力は一向に日の目を見ない。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com